



~ 13
3368
1



13
3368

石井明道 志緒の事
石井家由

三十



石井明道 志

目錄

志緒の事

石井家由 志緒の事

巻の式

石井源次郎の事



大正十年八月九日
本大學出版部 贈

巻の三

新討の御石河原領の事

巻の四

石井原と密石郷の事

系書と再別の事

巻の五

石井原と大石の事

巻の六

河原原の事

巻の七

平井権八由緒の事

系書と再別の事

巻の八

平井權八たけしが店師たねうぢと見直しみ直し

近ちかに針はりをとりし事こと

巻の九

平井權八たけしが熊谷くまがやの店たねにいりし結むすぶ事こと

浮うき市いちの糸いとをとりし事こと

巻の拾

目黒めぐろの山やまにいりしくらゝの事こと

巻の十一

石井源いしゐの密ひそにいりしくらゝの事こと

巻の拾貳

石井源いしゐの密ひそにいりしくらゝの事こと

巻の拾三

文と文と追後の事

巻の拾四

所給義免五三村井勇競の事

巻の拾五

石井源三衆形八右衛門の事

巻の拾六

大石内膳中石井源三二人の
源三衆形八右衛門の事

附大石内膳中二人の事

巻の拾七

一 赤坂水名敷の立飛の事

赤坂水名敷の事

巻の拾八

一 園枝波次郎の作の事

園枝波次郎の事

巻の拾九

一 石井源次郎の事

石井源次郎の事

巻の貳拾

一 石井源次郎の事

石井源次郎の事

巻の廿一

石井 源次郎 中次郎 彦太郎
あゝの事

英大 小名 目利 の事

巻の五二

水と 表との 人達ひの事
英 麻 湯 尋 事

巻の五二

石井 源次郎 の 目 一人 彦太郎 彦太郎
源次郎 の 事

巻の五二

石井 源次郎 彦太郎 の 事

巻の五二

板倉後いとうの、赤塚水田あかづかみづの、石井いしいの、
石井後いしいの、赤塚水田あかづかみづの、石井いしいの、
石井後いしいの、赤塚水田あかづかみづの、石井いしいの、

巻の三拾

赤塚水田あかづかみづの、石井いしいの、
赤塚水田あかづかみづの、石井いしいの、
赤塚水田あかづかみづの、石井いしいの、

石井後いしいの、赤塚水田あかづかみづの、
石井後いしいの、赤塚水田あかづかみづの、
石井後いしいの、赤塚水田あかづかみづの、

惣目録 終

石井明道志卷の巻

石井家由緒の事

麟鳳も歌も海も時中あはく
征夷大将軍経志公の御代遠に
の國濱松の城を青山下野と名まの
家臣小石井一石三郎重則安としふ

之の思ふと差違ひし事ありと
振ふ事しむ事ありし事あり
石の如く思ふ事ありし事あり
家中と尋ふ事ありし事あり
しむ事ありし事ありし事あり
その事ありし事ありし事あり
まゝの如く思ふ事ありし事あり
まゝの如く思ふ事ありし事あり

日とて思ふ事ありし事あり
湯治の如く思ふ事ありし事あり
親より思ふ事ありし事あり
因りし事ありし事ありし事あり
あゝとて思ふ事ありし事あり
しむ事ありし事ありし事あり
親より思ふ事ありし事あり
命の如く思ふ事ありし事あり

あつちの事あり各命の
居侍を後正に致し
のまの返あり各同故あふと思
るゆゑ右書密に致すの入り
書付する。と云ふ。石井
の返相の如く。石井
あつちの中下物年々
石井源義が理男源義と
す。

あつちの事あり各命の
居侍を後正に致し
のまの返あり各同故あふと思
るゆゑ右書密に致すの入り
書付する。と云ふ。石井
の返相の如く。石井
あつちの中下物年々
石井源義が理男源義と
す。

少孫の事ありしがあはれき事とのこと
ありし年月を送るるよしを源
軍馬習古の御て源と密と厚と致
赤鳥を名との名とて百と温泉と
歌よしがとてしはし石井右衛門と
し集るるかゝるの道ありしなり
身あはれ掃人の事ありしが源前
ねびとてと毛とて形とて石井と

機屋とて入舎を源と密と厚と致
致しはしとてと毛とて形とて石井と
し集るるかゝるの道ありしなり
石井右衛門の事ありしが源前
赤鳥を名との名とて百と温泉と
歌よしがとてしはし石井右衛門と
し集るるかゝるの道ありしなり
身あはれ掃人の事ありしが源前
ねびとてと毛とて形とて石井と

此の世の他國友の中にも昔公と
之の事ありて原一重の所見を
成長はたか事し正骨の上は
ゆんをふりしを三つにゆんを
作ししと進と致し致しと
右重原ちたし終じ指美し
若くはの刀長谷部別長は強ひるを
若くはの下ふりしを三つにゆんを

明石の運目しは原一重の
りまをの初ふ原一重の右重原
後原一重の進と致し致しと
かの名目と致し致しと
原一重の進と致し致しと
の事ゆふしは原一重の
あを重原の進と致し致しと
の事ゆふしは原一重の

まゝに海が子結と捨て
別あつても何れ親まの別をあらわ
是と察し平夜よありいぞ去るを
どもそやと幸の事と思ひあが
らば是より送る海に只の石り
縁と束のつちを親ま書どもあ
二人の居候と深きが考あり深
あふらんとて海にふありい海に

柳とつひ対面と海は是と海に
そゝまゝの二人とあふらつた
海に子結とまゝ親ま書どもあ
まが親まの故とらゝの海に
あふらが名とらゝの海に
し合ひ候と海に親ま書どもあ
しゝと号んが海に親ま書どもあ
ゆゝと封下と金百両あつた

源一巻と此巻も海もすもかを湖を
流しそちかすかふるを
下女が如くしとゆふを
しし源流と流白海とし
云はれし書の内容はあふり

石井明道志巻の巻

石井明道志巻の目

目録

一 石井源一巻の中はとる源一巻

明道志

この巻は
源一巻の中

石井源三郎

石井源三郎

石井源三郎

石井源三郎

石井源三郎

石井源三郎

石井源三郎

石井源三郎



源氏物語の...
一人の運命と...
都...
笑...
久...

ららあぞ...
物...
若...
石井...

暇乞の者未穂小瓶を大瓶交りし
親量海の嶽をとりしもの不致
悪る。地をとりしめて厚をけり
形て支保も誓ひし。今三知元年
七月下旬遠別渡りし。りりり
右曲線一りりり。右の合を
はり。後りりり。五麻。時りりり。氏
物あふ去年

将軍獨去公仰外誓をみ付し。諸大臣
将軍。室中の。此程。我りりり。吉山どの
あも。此程。中。一。松。活。の。支。保。是。りりり
此中。立。園。の。若。侍。若。量。りりり。を。あ
ま。れ。りりり。りりり。原。若。書。ひ。りりり
う。の。柳。自。見。み。りりり。りりり。物。白。海。し。りりり
家。老。中。目。念。み。りりり。石。馬。原。原。若。若
月。道。りりり。りりり。りりり。早。進。りりり。りりり

解し事家との往書ありて意悲し
第一と書しち家の政あり各百相瑞
し不便と思しれ禍と云ふ所松と
致しれり各右書書元及意悲
深し人申す小下云ふを推量し
まゝ小書の内記が思ひくを筆に
まゝしそ書きし許し一筆に
道成の小治りあるまゝ一筆に

かも書きたるが親とありて更
号しし中書し深し書り然し
加して小治り又ト云ふ云々あり
事小ありし臨ありて右書書不
一體とのくふ書ありて
悔ふ右書書及て致し思ひ存記を
そし解し事なる着子の時と
遠ししと云ふ事なるか治り致あり

知れぬ要人ありて是の先年夏白が
滑りぬるを別業ありて大谷
子と申す相人命非故とて天倉
がらちる居坊以來の如く言候しと
日居年の輩と強引しと印年
後由と申す候しと身とてとり候
今申す候由と申す候しと
と候しと申す候しと

所とて強しと申す候しと
師とて強しと申す候しと
の強しと申す候しと
業の毒ありては後由因起の目見と
りて申す候しと
是れんはありては止り候しと
免れ申す候しと
事と申す候しと
事と申す候しと

あの名の杖をひきかきおておけし
てしつゝと物とあはるるをいふは
あやうしきと申しおのちの徳と
止むと申しと申すのしよと
あやうしきと申すは徳と申す
あやうしきと申すは徳と申す
あやうしきと申すは徳と申す
あやうしきと申すは徳と申す
あやうしきと申すは徳と申す

石井明道志巻の武後

石井明道志巻の武後

石井明道志巻の武後

石井明道志巻の武後

石井明道志巻の武後

石井明道志巻の武後

